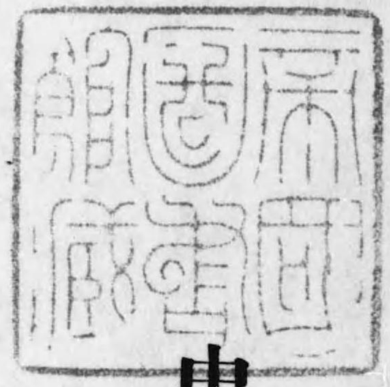
始

特237
692



中村樂天句集

大正九
銀の世界や
去月内

序

中村樂天の名は論客として明治年間に既に高かつたが、其の後先生の名利に恬澹なるため現在に於ては却つて昔程有名でなくなつて仕舞つた。（かう云ふ奇現象を呈したが俳句史を心得て居るものは皆先生の名を知つて居るであらう。）然し先生は愈〻俳句のためにひそかなる努力を續けられた。

生前句集を出すことを屑しとせざる先生に、我等三度乞うて發行の諾を得た。先生の句一千三百のうちより五百五句を選んでこの句集を成す。

昭和十二年初冬

中村樂天句集刊行會

目次

新年……三
春……一一
夏……三五
秋……六九
冬……九九

頁

新

年

元日に男子産みたる女房かな

大皿の鮓の出前や松の内

ほのめくは梅が香なれや初東風す

おのづから屋根より羽子の落ち來たる

通る人に落ちたる羽子をわびしめり

賑かに羽子つき居りぬお境内

病床に羽子つく音を聞けるのみ

初風呂の沸きすぎたるを知らでありし

初風呂をどし〳〵うめて入りにけり

酒用意命じて初湯浴びにけり

炭つぎに來て渡したる年賀狀

謠初畑を隔つる隣にて

宵曲氏の意中を忖度して

讀初先師手澤の古書うれし

だしぬけに庭先に來ぬ猿廻し

燃えそめて水田に映るどんどかな

初荷今出て行く店に物買へり

とろ〳〵の雑煮冷めたり枕上ミ　風邪

延喜式に見ゆる産土神注連飾

初火事や逃げずに済みし逃げ仕度

二羽三羽城山よりの初鶏　故郷

目覺むればすでに十時や福壽草

春

二ン月の庭に青きは韮ばかり

きさらぎの椿の蕾かたきかな

春寒き風の中なる日筋かな

垣外や已に春めく人通り

草庵

この縁や遅日の埃拭かであり

永き日の豹の欠伸を見たりけり

店先に病夫寝てをり春の晝

春曉の柳くゞりて牛乳屋

老梅居にて

悼句まだ蛇笏一人や宵の春

シュッ〳〵と潮吹く貝や春夕べ

ホースより水飲む人や春暑し

徂春の悴める手を爐に伸べし

徳藏寺

住職は石器道樂春の寺

須臾にして辛夷に晴れぬ春の雷

勝馬を曳いて通りぬ東風の町

藥湯を出て夕東風に吹かれけり

這ひ寄りて鏡見る子や春の雨

春日射して棒縞の夜具重げなる

このあたり水田ばかりや花曇

一人降りて杉田驛なり春曇

春風や大箱積みし海苔問屋

燒跡の芝の青めるる雪解かな

大松の幹焦げてゐる燒野かな

春の山下り來しところ煙草店

ベンチ見れば則ち慰ふ春の山

雛壇に近き行火や佗び住めり

母の亡き淋しき雛を祭りけり

押繪雛一幅掛けてあるばかり

長男は雛を飾りて出勤す

外孫女

片假名の手紙よこしぬ雛祭

雛菓子の鯛の尾赤く美しき

桃の枝さげて詣でぬ彼岸寺

爐塞いで淋しき老となりにけり

近くまで家の建ちたる畑打てり

目刺焼けば猫媚び鳴いて戻りけり

御所望とありて目刺を献じけり

寒食や昔ながらの破風造り

校正や焼きし草餅そのまゝに

履物へ已に來りし汐の渦

汐干潟いまし乾ける泡の痕

川尻のつめたき水や汐干潟

折れ竿に汐干の獲物舁き行けり

きざはしを登りしところ甘茶佛

焼跡の凧あげ場所となりにけり

大凧の險しき雲に唸りゐる

たぐり〳〵て眞上まで來し凧
雲間凧夕日に映えて唸りけり
凧あぐる人等は河の彼方かな
花種を蒔いて嫁ぎし娘かな
串刺の慈姑たべつゝ花見かな

門づけが又も來りぬ花見の座
青麥の畦に種痘の掲示あり
畦塗るや高嶺は雲をかぶり居り
戀猫の向き合うてをり塀の上
やがて出る虫ゐる穴の土動く

雲雀高く高く揚りて薄曇

燕低う入り來し土間の廣さかな

蛙の子河骨青む一ゝところ

この庵の月の朧や蝌蚪の池

寄居蟲の足の赤さやさゝら波

いさゝかの土を被りて虫出で來

囀や城下はづれの青麥に

子雀の啼くところより藁垂るゝ

猫の子を貰ひし縁の大工かな

猫の子を遣るとて猫を畫きけり

蒲團干せば又も仔猫の寝てゐるよ

青みどろかぶりて浮きし蛙かな

畦ゆけば皆水に飛ぶ蛙かな

水引いてまだ搔かぬ田や蛙鳴く

日溜りにたけし蕗の薹蠅生る

久地梅林

幹裂けて倒れしまゝに咲ける梅

古梅皆支柱に凭れる邸かな

悼鳴雪翁

老梅居梅咲きそめて翁在らず

梅見客池をへだてゝ歩きけり

四阿へ御茶を運びぬ梅見茶屋

老梅の裂けたる幹の括りあり

瘠せ〳〵て煤けし枝の猫柳

まる〳〵と若木柳の猫のつや

自炊兩三日

鰹節を入れ忘れけり若布汁

海苔の枠又も籬にもたせ掛く

軒先に皆海苔干して小家がち

海苔乾く音こゝちよき廣場かな

瑞垣に海苔簀干しある村社かな

荒潮に漂ふ海苔を掻きなやみ

心朽ちてがらんどなるが木芽ふく

木々の芽の影あきらかに鯉泳ぐ

芽柳の並木見下ろすホテルかな

枸杞垣に迫る低さや薬庇

芹も摘み蜆も掻きし昔かな

川上の土手焼くる見て芹摘めり

日照雨して辛夷の庭の明るさよ

九品佛

この寺や廻廊近く大椿

藪中の椿に日ざしありにけり

坂道や櫻を見つゝ下りて橋

山寺の彼岸櫻や松の中

櫻ある堤に對す二階かな

雨戸まだ明けぬ二階や花の土手

咲きそめし櫻の赤き匂やかさ

花の間より覗けば深き空の色

切石をもたせかけある櫻かな

病床にありて愉しき花日和

ヒヤシンス一鉢持ちて二階住

峰青嵐翁庭前にて

朝な〳〵この若芝を踏む君よ

針金で吊りある枝や松の花

水底に映れる空や蘆の角

吹きそめしあやめの芽やな砂の中

馬も馬子も尿してをり豆の花

バスを待つ茶店の前や豆の花

白藤の短かけれども品のよき

夏

初夏の菜種尖れり花稀に

夏めくや花鬼灯に朝の雨

夏淺き草花店や種も賣る

短夜の早やほの白き襖かな

短夜や廊下灯りて明けて居る

短夜や寄席の前掃く裸人

篠谷養玉院

五智如來皆涼しげにおはしける

涼しさや瀬音の中に犬とあり

六月二十二日末子武夫逝く

空梅雨や汝が植ゑし蒜草中に

梅雨霽れや病床移し掃かせ居り

梅雨晴や窓に迫れる松の蕊

梅雨晴・や柿の花掃く老下僕

青嵐や杉皆動く井ノ頭

青嵐や航空便の俳句稿

雲の峯すでに崩れて驛に着く

遠雷を聞きつゝ胡瓜刻み居り

十薬の強き匂ひや大夕立

硝子戸の隙に降り込む夕立かな

夕立に濡れたる縁のはやも乾く

虹の根を出て來る人馬ありにけり

片かげや已に出てゐる古本屋

黒くなる土を見やりつ喜雨の酒

刈り込んで庭木月並夏の雨

人通る毎に出水ゆれ玄關へ

出水あと疊入れざる一ト間かな

目の届く限り青田や鷺のとぶ

くゞりゆく瀧の後ろの徑かな

名主の瀧

瀧の上に裸男の現れし

駕籠で來し妻子遣過し清水かな

松落葉めぐり流るゝ清水かな

打上げし西瓜の皮や土用浪

老いぬれば物ちぐはぐや衣更

曾我樂天を訪ふ

新茶煮て曾我樂天は庭自慢

新茶のんで惠那の翠微を仰ぎ去る

苺買うてセルの夫婦の去りにけり

苗賣の行過ぎたるを呼び止めし

苗賣や人輪の中に蹲み居る

祭店刈田の畦にならび居り

祭の灯借りて句帖に句を書けり

青桐の枝折り行きぬ荒神輿

滿洲へ行く話して麥刈れり

麥打つや庭の隅なる花葵

麥打にまじる白粉女かな

麥を打つ柄竿高う塀の上

茂山の影を亂して代田掻き

産土神の屋根見えてゐる田植かな

笠を背に早乙女戻る線路沿ひ

雨漏りや疊に滲みし蚊帳の藍

蚊遣赫と燃えて柱に映えにける

紋所歪みて見えし夏羽織

椅子の人へ團扇渡しぬ肩越しに

箱根より下り來る人の團扇かな

震災直後

日除して鉋鋸など賣れり

乳子搖りつ窓より日傘受取りし

日傘傾けほゝ笑みかはし別れける

浴衣着て異人のあるく濱邊かな

能役者の汗いたはしや面ンの内

家と倉のあはひに涼む床几かな

蓋取りて見てゐる鮓の馴れ加減

風鈴の遠音となりし寢心地や

花氷圍みてラヂオ聽き居れり

若い衆の晝寢起して句座とせり

二階より下り來し人の裸なる

肌脱げば濡れ手拭を當て吳れし

荒潮のしぶきに咽び泳ぎゐる

遠泳の黒き頭が見ゆるのみ

杭抱くや泳ぎ疲れし顔ばかり

背泳ぎの顔にかゝりし浮藻かな

みだれ籠に掛香なんど艶めきぬ

堰き止めし水にボートを漕ぎ居りぬ

三粒ほど麥の混れる握飯かな

せゝらぎを横ぎる蟹の迅さかな

墓の眼に夕月映る涼しさよ

鋤き終へて水張りし田や鴉の子

放たれて川風に飛ぶ螢かな

大螢汀の草に沈みをり

蛭もゐて樹下のせゝらぎ涼しかり

鮎漁の篝まぶしく山見えず

蔑切の蔑ゆるがして移りけり

蟻の列松葉牡丹に沿ひ行けり

煙に酔うてよろめく蚊をば打ちにけり

蝙蝠や二軒並んで安旅籠

白百合とダリヤを縫うて蝶飛べり

川崎圓眞寺

木の間より微風生れつ蟬時雨

糸つけしまゝ逃げて來し蟬のあり

しと〳〵と雨降り居れど油蟬

この毛虫栗の花ともまぎらはし

大金魚椎の落花をつゝき去る

藻を出でゝ金魚の腹の白さかな

流されつ飛び返りけり水馬

牡丹の堅き蕾や尖赤き

蕊ばかり殘る牡丹に小蜂來ぬ

大寺や裾山續き餘花の庭

池半ば埋めて空家や葉櫻に

茄子苗の大きな包み提げ行けり

榔若葉一ッ〳〵に花房が

芍藥の一畝もあり馬鈴薯畠

芍藥に仕掛けてありぬ鳥威し

垣破れて棕櫚の花咲く空家かな

卯の花や御僧に足濯(すすぎ)參らする

卯の花や客に駕籠來し玄關先

麥畑の畦の煤けし土瓶かな

水口や垂葉ゆらげる杜若

根上りの一トかたまりの杜若

土手下に紫陽花見えて小料理屋

南天の花こぼれゐる垣根かな

あまりにも石門低し花葵

どくだみに鎌のとぎ汁かゝりけり

どくだみに鎌研いでゐる二人かな

長竿で所化がはたける實梅かな

落さるゝ實梅を彈く新ラ蓆

師が家や玄關近く枇杷熟す

同じ路次に又出でしやな花柘榴

底深う河骨咲いて池澄めり

水底に花の黄なるは河骨か

二つ石にたぎる麥湯や青芒

蔓草に卷き倒されて青芒

庭掃くや梧桐の雫に打たれつゝ

故郷

夏草を搖りて讀みぬ墓二つ

雨に濡れて苺摘み來ぬ十粒程

山寺や白百合咲いて僧はあらず

黴臭き羽織袴や燒香す

故郷の村社

明治七年我等が上げし繪馬かびぬ

俄か雨バナ、に濺ぐ夜店かな

青栗の累々として屋根の上

毬栗の青き小枝を折り持てり

睡蓮や舟の煽りに揺れてをり

睡蓮に雨つのり來て客揃ふ

點々と蓮の葉の雨白きかな

古池の寂びて白蓮荅なる

大縊れありて歪めるトマトかな

温亭居士を偲ぶ　二句

就中大輪のダリヤ剪り呉れし

各々にダリヤ持たせて歸らせし

二三本ダリヤ咲きゐる貸家かな

ダリヤ畠の眺めもありて松の丘

夏萩の梢柔らかく頰に觸れ

札所寺石屋を前に百日紅

紅葉とも見えて病葉鮮かに

秋

新涼の灯一つ木の間より

うそ寒やベル押せど留守らしき家

藤の實の垂るゝ殘暑の茶店かな

灰汁桶に星映りゐる朝寒き

長男來る

靴脱がで立談し去る朝寒き

垣外は家並人語や墓地の秋

颱風の石垣島へ來しといふ

颱風の警報出でぬ雨の驛

野分あとの青き落葉を踏み行けり

温亭居士埋棺の折

野分止んで薄日當れる墓標かな

月出でゝ牡鹿の角の影長し

雲を出づる月のはやさよ水の底

月出づべく空明るさや峰の松

この家の歪める影や月の庭

明月や暗き玄關に戻り來し

意外にも右の木蔭に月の影

露重く一むら萩の倒れけり

山陰道旅行中

日當れる高峯〳〵や霧の海

木の梢に霧うすれつゝ日當れり

夜の霧の風呂焚くあたりあかきかな

秋天や沼をめぐりて杉木立

大井町篠谷の五智如來

秋晴を佛の御手の修繕かな

母の背に躍り居る子や秋日和

鶴見總持寺

境内の芝生青さや秋の雲

平林寺

業平の塚に文字なし秋の風

震災避難後一日元の家へ行きて

眠りゐる置き去り猫や秋の雨

向島雲水にて

給仕みな所化の姿や秋の雨

秋出水盥うかべて遊ぶ子や

かそけさの秋の水やな苧を浸す

竹林の徑窮まりて水の秋

平林寺所見

秋水を汲み來て剃りぬ師の頭，

手賀沼を渡りて

秋の山子の神らしき松高し

村の灯を慕ひつ秋の山くだる

紺碧や花野つゞきの海の色

花野盡きて大寺の庭破芭蕉

花屋などと人に呼ばれて花圃作り

よみにくき西洋花や花畑

乏しらの水落さずに置きにけり

門を出で刈田淋しく眺めけり

建ち並ぶ貸家の前の刈田かな

吟行や刈田横ぎることもあり

一つ家の七夕竹や畑の中

蟲賣の來そむる町となりにけり

峰青嵐翁老人五句集七月號課題
魂祭を作らで逝き給ふ

先生の魂祭とはなりにけり

行過ぎて呼戻されぬ墓詣

墓參人の後より手桶提げゆけり

燈籠の消えし縁より訪れし

この娘又わが前に踊り來し

興がりて蓑を着けゐる踊かな

踊り果てゝ露けき徑を戻りけり

接待の煤けし茶釜沸りをる

夜相撲の人氣を集め優男

畫花火物濯ぎゐる眞上かな

彼岸中日吟行より戻りて二句

妻子まだ戻らぬ家や秋灯

秋灯廣き座敷に一人あり

訪ね來て木の間の家の秋灯

芋あれば事足るといふ月見酒

わが庭の糸瓜も咲ける子規忌かな

旅にして名殘の蚊帳を吊られけり

鳴子引いて裾山曲り行きにけり

岡を越えて鳴子の繩の長きかな

水づきたる稻刈る人に西日かな

刈り置けば束ねて呉るゝ稻なりし

郷社

境内や稻扱きさして人あらず

女一人水田の稻を刈りゐたり

障子張をちよと手傳うて父去れり

掛稻やまともの富士の眞白なる

菊作る主人は老いぬ明治節

蜩や墓一々の影長く

手燭つけて蟋蟀の鳴く堂に入る

赤蜻蛉目黑の路の稻熟す

新藁に弱き日射しや赤蜻蛉

老僕は秋刀魚の腸を拔かしめず

炭火强く秋刀魚の脂燃え上る

秋刀魚燒いておろし大根ゆたかなる

干籾を飛び越え去りし蟹蝦かな

稲すゞめ稲刈りてより芋畑へ

鯊の腮にひつかゝりゐる鈎をとる

椋鳥の凡そ百羽も飛び去りし

我子を紹介する手紙に

この鹿や淋しき顔は親ゆづり

家問へば木槿の垣の三軒目

朝顔の絡む垣越し縁見ゆる

朝顔や枯竹攀ぢて垂れ咲けり

日除ゆらぐ毎に日あたる西瓜かな

去りし客西瓜屆けて寄越しけり

皿に溜る西瓜の液の薄赤き

大西瓜縄で縛りて臺所

ブリキ屋根に大露あびて南瓜かな

大芭蕉句碑の面に觸れて居り

稲の花に小城指さす汽車の窓

穂先すこしほのめき出でし芒かな

萩折るを窓より所化の覗きける

下葉少し泥にまみれて萩低し

出水あとの萩を括りて居られけり

芋煮るや祭の酒の殘りをり

里芋を洗ひ上げたる白さかな

葉鶏頭や山北驛の柵の内

籾干して庭の隅なる雁來紅

嵐凪ぎしあと夕焼や草の花

夕焼に一もと高き紫苑かな

豪徳寺書院

障子閉めて庭一ぱいの秋櫻

コスモスや小家の建ち並び

山畑の電信線や蕎麥の花

小さけれど形正しきふくべかな

ぶらさげて電車に乗りぬ烏瓜

鬼灯の早く熟れしが蝕みぬ

間引菜の捨てゝあるなり踏まれける

草に刺して小さき菌ばかりなり

青松葉敷いて松茸一トならべ

日蔭なる茱萸もほそ〳〵熟れてをり

古墓や山梔子の實の色づける

蝕める藤豆の莢白きかな

床の壁乾かで菊に灯しあり

夕月のすでに射し居り菊花壇

一輪の黄菊この庭を明るうす

ゑみ栗の落ちんとするを仰ぎけり

笑み栗をゆさぶり落しゐたりけり

十ばかり拾ひし中に虫栗も

茹栗を賣りつゝ茶漬かき込みし

大傘を立てゝ茹栗商へり

雨しぶき浴びたる栗を商へり

實銀杏泥まみれなるを拾ひけり

蜜柑むく瞳の可愛さやしばたゝく

蜜柑剝く猿の巧者を笑ひけり

鄉社

この宮の紅葉しそめし雜木かな

畑中や紅葉しそめし柿大樹

をり〳〵は薄日もあたる紅葉かな

柿苗に紅葉殘れり二三枚

針金で縛りし幹に蔦這へり

良き茄子の種を洗ひて乾かしぬ

殘菊の霜に耐へゐていさぎよし

土を出て莟曲れる曼珠沙華

曼珠沙華切り崩されし塚の上

貝塚の貝うづたかし曼珠沙華

草花の露けき蕾開きそめ

存

立冬や柚子熟れてゐる百姓家

初冬の隣の二階木の間より

初冬の庭に咲きたり菊一株

團欒や小春の陽射し室に滿ち

小春日の庭かゞやかや梅擬

短日や使待たせて校正す

日昃るや冬至の縁の飯櫃に

室咲の木瓜の赤さや春隣

盆梅に水を濺ぎぬ寒の内

温泉けむりや峡の底なる冬の町

しぐるゝや早やも濡れたる猿すべり

時雨るゝや今を盛りの花石蕗に

驛までの石ころ道や今朝の霜

棧橋の霜に荷運ぶ仲仕かな

いつまでも消えぬ霜あり倉の陰

仲見世の灯の明るさや夕霙

長靴の豆腐屋一人みぞれ行く

玉霰忽ち來り忽ち歇む

あたゝかく冬日のあたる障子かな

枇杷の葉に風花すこし白きかな

とけし雪柚子の葉を辷る力なさ

四圍の山雪を頂く溫泉町かな

藏王に初雪降りし便りかな

雪晴の兎狩とはなりにけり

青夢君に與ふ

艦搖るゝ日の北海の吹雪詠め

雪に撓む竹の下なる流れかな

雪合戰工場の屋根の敵になやむ

凧や燒鮒買うて汽車に乘る

凧の驛前にして自動車呼ぶ

落日や枯野の果に眞赤なる

この池や緋鯉も見えず氷浮く

湖に沿うて大松靑し冬の町

髮置の白粉の顏に觸れし幣

故郷や父に肖たるが麥を蒔く

煙草店出して麥蒔人任かせ

自炊三句

葱汁の煮えこぼれ瓦斯横へ燃え

葱汁の吹き上りたる匂ひかな

葱嚙むや舌を刺したる熱き液

粕汁が名代の店も書寫道に

闇汁の十六さゝげめでにけり

先客の淋しき貌や燒藷屋

うるかにて熱燗ちびり〳〵かな

娘や嫁の無沙汰喞ちつ冬籠

炭取を隅に置きたり冬座敷

炭取の中に蜜柑の皮もあり

屑炭を繼げば枯葉の匂ひけり

夜の海へ靡く焔や大焚火

焚火あと清く掃かれてありにけり

焚火するあるじの側に犬機嫌

ストーブに衿卷とらぬ一人あり

客去りて日の當りゐる火鉢かな

熱すぎる懐爐を臍にあて居りぬ

蹌踉と風邪のからだを電柱へ

風邪の咳夜中に出ぬが嬉しくて

笛摩君來訪

自炊老の風邪引けるさま見られたり

背の子の脱げかゝりたる頭巾かな

うまゐ子をねんねこのまゝ抱き取りし

枯芝にねんねこの子をおろしけり

著膨れて晩餐會の主人かな

大道に古足袋鬻ぐ灯の暗し

若人にまぢり撮影れぬ懐手

猫柳のふくらむを見つ日向ぼこ

日向ぼこ電柱の影昃り來し

焼け落ちし音に上りし焔かな

電柱の焼けゐる報や停電す

大火の粉庭木に落ちて消えやらず

鎮火して明るく點きし電燈かな

朱筆持つ手のかじかんで圏歪む

悴けたる手に釣銭を數へけり

藁苞のすが〳〵しさの納豆かな

店火鉢に酒粕燒きし何奴ぞ

串柿の潤ひ持てる黒さかな

串柿を折り得で曲げしまゝにあり

氷豆腐を見廻る燭や葱に映え

ごろ〳〵と柚子湯の底の柚子の種

湯に入るや踵に觸るゝ柚子の種

盆梅を捧げ戻りぬ年の市

欲しきもの鉢木ばかりや年の市

煤掃いて水仙活けてありにけり

水鳥や木洩れ陽に群れてゐたりけり

水鳥や蹼揃へ岩の上

藪といへど三坪ばかりや笹鳴ける

二三本沈む海鼠や桶の底

凍鶴の日南に向いて歩き初む

まる〳〵と枝に竝びぬ寒雀

茶の花に欠伸してゐる乞食かな

山茶花をめぐりて去りし醫師かな

大根洗ふ人等に薄日當りをり

白菜に落葉しそめぬ苗銀杏

蠶豆の二葉埋めて落葉かな

横濱三溪園

塔高く冬木に聳え下は海

碑のうしろ夕日や枯尾花

日に映えて一望白き枯芒

一叢の燃やして見たき枯芒

だら〳〵に庫裡の普請や枯芭蕉

枯茅に沿ひて乏しき流れかな

枯莖に種もろこしの殘りをり

病床の友に冬ばら持たせ遣る

病友

卓上にハイネ詩集と冬薔薇と

水仙に午の日射しや骨董店

雪搔いて水仙おこす朝かな

旭をうけて皆盛りなる冬椿

深々と雪かぶりをり冬椿

冬至梅はや咲きそめぬ疊替

リヤカーに載せて運びぬ花八ッ手

昭和十二年十二月十七日印刷
昭和十二年十二月廿一日發行

〔定價壹圓五拾錢〕

編輯兼發行者　東京市世田谷區玉川奥澤町一丁目二五三番地　中村樂天句集刊行會

代表者　東京市葛飾區小菅町一、二八四番地　林　壽

印刷者　東京市葛飾區小菅町一、二八四番地　豐田作治郎

印刷所　小菅刑務所作業部

發行所　東京市荏原區下神明町五四九番地　杜松堂書店

振替口座　東京　七四四八一番

終